

「牛肉の安全・安心は 生産システムの再構築から」



TAKAHASHI Masayoshi
高橋政義
山地畜産研究部長

昨年来のBSE問題や食品偽装問題を機に、食の安全・安心を語られる場が多くなって、安全と安心の距離があまりにも大きいことを思い知らされた。安全が確保されたとしても、その安全をどのように証明していくのかが重要であることも。

おりしも農林水産省は、『「食」と「農」の再生プラン』を4月11日に公表した。「食」の安全と安心の確保と、「食」を支える「農」の構造改革の推進、人と自然が共生する美の国づくりを進めるといふ。また軸足を消費者に移し改革を組織を挙げて取り組むという。この再生プランの実効に期待するとともに、生産する側の対応が問われていることを確認したい。

特に食品の生産・流通情報を追跡・開示するトレーサビリティがクローズアップされて、農場から食卓までのトレーサビリティを確立するという。これは再生プランでの柱となっているが、これをやれば顔の見える関係が築けるかという、事はそう単純ではない。生産者と消費者の双方が納得でき、信頼を回復することが原点となるが、生産者が説明責任を果たすかが問われるものといえる。

このことを肉牛生産の立場からどう捉え、生産現場の対応の中で生産システムをどのように再構築していくかが、関係者の最大の関心事なはずなのだが、未だ具体的な形が見えてこない。昨今の枝肉市況や子牛市況の回復で、この一年間にあった諸々の痛みをも忘れかけているのではないかとの不安感さえよぎる。

これまで大量な輸入穀物飼料に強く依存してきたわが国の牛肉生産は極めて不安定な加工型畜産だと言われてきた。本来的には、地域の飼料資源を基盤に有機的循環、すなわち土—作物・

草—家畜によって生産すべきであることを忘れて粗飼料まで輸入してきた。昨今いわれる環境保全型畜産、自然循環型畜産、日本型畜産、日本型放牧等の用語には、これまでの輸入飼料依存の加工型畜産に対する反省から、生産システムを再構築するという意味合いがあるが、具体的に今後どうするかが問われている。

今や世界的な潮流となっているアグロフォレストリーの考え方を取り入れることが、生産現場での環境保全型畜産構築にむけての第一歩になるとの観点もある。それぞれの経営基盤の安定と持続的生産態勢確立のために、今までの固定観念からの脱却を出発点として、各地域における肉牛生産システムの再構築に期待したい。

そんな中、今また放牧飼養の見直しが必要という声が高まっている。具体的にどうするかは明確でないが、放牧に熱い視線が集まっているのは事実のようだ。一口に放牧といっても、集約放牧、公共牧場、牧野とも組み合わせ、水田も利用する周年放牧、遊休地や棚田管理の放牧、シバ利用の低投入持続型、さらに林地を利用する混牧林等のタイプ等がある。漠然としてはいるが、いわゆる日本型放牧への期待であり、地域の土地条件や自然条件を生かし、担い手等人的資源を活用した生産システムとして、放牧が再評価されつつあるといえる。

何れにしる舎飼い一辺倒ではない肉牛生産のスタイルを、それぞれ地域の土地利用の中で築き上げることが求められている。幸いにして、この面での研究蓄積は多く開発技術の現場適応を提案し実行することは可能で、その過程で新たに派生する問題の解決に、我々の技術力を結集していくことが望まれる。関係者の奮起に期待したい。